

価値研究の最近の動向と課題

廣 瀬 春 次

Recent Trend and Further Direction of Studies on Values

Haruji HIROSE

Although values are an important determinant of human behavior, not much attention have been paid to values. In this article, recent studies suggesting the importance and uniqueness of value scales were reviewed. First, the author adopt Rokeach's view of values as the criterion, and supported Shwartz's model and scales of values, which is useful for studies of dynamic relations among values and human behavior, and then reported the procedure for inducing value and attitude changes, and finally, presented the current utilization method of values on psychotherapy.

Key Word : Values, value systems, measurement of values, value change

価値（Values）という言葉が我々は日頃何気なく用いている。つい最近も、ある先生が砂漠を見て価値観が変わったと述べられていたし、また、ある新聞では、日本に來ている外国人を理解するには、相手の価値観を理解することが必要であるといった記事が載せられていた。価値は、特殊な状況での人間行動から人の一生、更には国家間の関係を左右する重要な心理的・社会的・文化的因子である。しかしながら、心理学において、パーソナリティや態度の研究に比べて、価値に十分注意が払われてきたとはいえない。本稿では、最初に、価値の概念に関するいろいろな立場を比較することによって、また価値と隣接した概念とを比較することによって、価値という概念の全体像を浮かびあがらせようと思う。

価値の定義については大きく2つの流れがある。一つは対象が価値を有するという視点である。行動主義的立場のSkinnerは、人間が価値を所有するわけではなく、どの程度強化の効果を持つかがその対象の価値であると述べている。この立場では、対象の価値次元として正か負の一次元を仮定することが多い。一方、人が所有するものとしての価値の研究を進めたRokeach（1973）は、「ある行動様式や個体が求める状態が、他の行動様式や求める状態より個人的、社会的に好ましいという信念」として価値を捉えている。またMaslow（1954）も、個人に内在する欲求の体系（低次から高次への序列で並べると生理的欲求、安全の欲求、愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求の順になる）に関連づけて低次から高次にいたる価値のヒエラルキーを考えている¹⁾。これらの立場は、どちらかというところ、対象との関連で価値を把握するというより、行動の基準として価値（Value-as-criteria）を捉える傾向にある。Spranger（1921）の立場は複雑である。彼は価値を

志向し、実現する意義付与的な精神的作用として認識、美的、経済的、宗教的、権力支配、愛情の6つを挙げている。更に、心理学の役割は個人を越えた規範的価値構造からの逸脱を記述することであると述べており、個人の外にあって基準となる価値²⁾を重視している。

本稿では、主に個人に内在する行動の基準として価値を捉える Rokeach (1973) や Schwartz (1992) の立場から検討を進める。以下に両者の価値の本質ならびに特徴についての仮定を紹介するが³⁾、これらの視点は人間の心理社会的行動を理解する上で生産的であると考えられる。同様の結論は、行動科学において価値が必要な概念か否かという論点においても成り立つ。価値概念を導入することが、個人差や文化差の理解に役立ち、人々の行動を予測し、臨床や実践のための知見を提供できるなら、人間行動の重要な媒介項として価値変数を位置づけるべきであろうし、従来研究がなされている他の概念と重複し、実りある成果が得られないならば、些細な変数として考慮されることはなくなるであろう。

Rokeach (1973) の仮定

- 1) 人々が有する価値の数は比較的少ない
- 2) 全ての人が、程度が異なるだけで、同じような価値をもっている
- 3) 価値は価値システムを構成する
- 4) 価値の先行要因として文化、社会、組織、パーソナリティなどが考えられる
- 5) 価値の影響は、社会学者が研究の価値があると考ええる全ての現象に及んでいる

Schwartz (1987, 1992) の仮定

- 1) 価値は概念または信念である
- 2) 価値は最終的に望ましい状態か行動に関係がある
- 3) 価値は特殊な状況を越えている
- 4) 価値は行動や事象の評価や選択に導く
- 5) 価値は相対的な重要さによって順位づけられる

価値の測定

Spranger (1921) の価値類型に基づく価値尺度

現在まで、個人差を把握するための価値尺度として最も広く受け入れられているものは、Spranger (1921) の6つの価値類型に基づき Vernon & Allport (1931) が作成した“Study of Values”であろう。この尺度では、見慣れた状況に関連して、6つの価値(理論的、経済的、耽美的、社会的、権力的、宗教的)のそれぞれにつき20個の選択(回答)ができるようになっている。それらは、

Rokeach (1973) によれば ¹⁾ 価値は欲求そのものではなく、欲求の変形された認知的代表である ²⁾ 規範は行動の様式だけに、しかも特殊な状況に関連しているが、価値は行動の様式だけでなく個体の最終的な状態とも関連しており、特殊な状況から独立している。 ³⁾ ゴードン (1975) らは、このほか価値の安定性を挙げている。

表1 “Study of Values” の具体的な質問項目 (Vernon & Allport, 1931)

1 部	質問 1	(a)	(b)
	科学的研究の主な目的は実的な応用よりも真実の発見である		
	(a) はい (b) いいえ	3	0
2 部	質問14 (この質問には女性が答える)		
	もし結婚するなら、あなたはどのような女性でいることを好みますか		
4..... a. 社会的名声を達成し、他者からの賞賛を集める		
1..... b. 家にいて家事をする		
2..... c. 生き方において精神的である		
3..... d. 芸術の才能がある		

1 部で“はい”の方に同意し、“いいえ”に同意しなければ(a)に3, (b)に0を記入, “はい”の方にや
や同意するなら(a)に2, (b)に1を記入。2 部の下線部の数値は同意の順位を記入

表1に示すように、2部構成である。津留ら(1975)は、このStudy of Valuesの日本語版(オル
ポート・ヴァーノン価値テスト短縮版)を作成し、青年の生活意識(健康状態や家族関係など10項
目についての現在の気持ちと将来の見通し、生活の不安や充実感など5項目についての現在と将来
の予想、生活に対する満足感についての過去・現在・未来の変化など)との関連を調べている。価
値テストの6つの価値領域において高得点者群を抽出し、これと生活意識諸項目との交差分析を行
ったが、有意な関連性は認められなかった。これらの結果から、津留らは、現代青年の価値観が
Sprangerが類型化したようにはっきりした領域をもっていないこと、この価値テストが時代遅れ
になっていることなどの可能性を指摘している。最近、酒井ら(1997)は、Study of Valuesが、
どの領域(対象)に興味関心を持っているかによって価値を捉えようとしているとして、むしろ
Sprangerが述べた対象への意義付与(あるいは価値の実現や価値の体験)という精神作用の側面
から価値志向的精神作用尺度を作成している。この尺度と教科の好みと職業興味との関連性を検討
した結果、Sprangerが示唆したように、同一の対象(同一の教科・職業領域)に対して複数の価
値が関連していることが示唆された。

Rokeachによる価値ならびに価値システムの尺度

はじめに、価値とは「ある行動様式や個体が求める状態が、他の行動様式や求める状態より個人
的、社会的に好ましいという信念」であるというRokeachの定義を紹介した。彼は、この定義に従
い、望ましい行動様式を道具的な(instrumental)価値、個体が求める望ましい状態を究極的
(terminal)な価値として、この2つの領域から価値尺度を構成する項目を選び出している。表2
には、この2つの価値領域に関連した価値を示す。この尺度で被験者は、それぞれの価値を人生を
導く原理として重要さの順番に配列するように求められる。全体を因子分析した結果、7つの因子
(第一因子：即時的な満足対遅延した満足 第二因子：有能さ対宗教的道德 第三因子：自己制限
対自己拡張 第四因子：社会志向性対個人志向性 第五因子：社会の安全対家族の安全 第六因子：

尊敬対愛 第7因子：内面志向対他者志向）が抽出された。Rokeachは、これらの因子のうち第2因子は道具的価値に、第4因子は究極的価値に関わっているとしているが、これらの結果から道具的な価値と究極的な価値の2領域が明確に示されたとはいえない。

Shwartzによる普遍的な価値の内容と構造

Shwartz & Bilsky (1987, 1990)によれば、価値は、意識的な目標という形で、人間の普遍的な3つの要求を代表している。一つは生物としての欲求、もう一つは調和的な社会との関わりの欲求、それに集団の生き残りと繁栄の欲求である。彼らはこれから、自己管理 (self-direction)、刺激 (stimulation)、快楽 (hedonism)、業績 (achievement)、権力 (power)、安全 (security)、順応 (conformity)、伝統 (tradition)、慈善 (benevolence)、普遍 (universalism) からなる10の価値の動機領域を仮定している。そしてこれらの動機領域に対し、指標となるような価値がRokeachの価値目録やその他の研究の項目から抽出された。仮説は、価値の構造において 1) Shwartzが示した目標タイプの違い (行動様式か究極の望ましい状態) 2) 動機的領域の区別 3) 個人主義か集団主義といった利益のタイプによる違い 4) 自己管理と従順あるいは業績と安全など

表2 Rokeachが作成した価値尺度項目

究 極 価 値	道 具 的 価 値
快適な人生 (人生がうまくいく)	野心 (難しい仕事, 高い望み)
刺激的な人生 (活動的で, わくわくする人生)	寛容 (心を開いて)
達成感 (十分な貢献)	能力 (有能な, 効力感)
世界平和 (戦争と紛争からの解放)	ほがらかな (明るい, 楽しい)
美の世界 (自然と芸術の美)	清潔な (きちんとした, さっぱりした)
平等 (同胞, 機会均等)	勇気のある (信念のために立ち上がる)
家族の安全 (愛する人を大切にする)	容赦 (他者をゆるす)
自由 (独立, 選択の自由)	協力的な (他者の福利のために働く)
幸福 (満足していること)	正直な (誠実な, うそのない)
内面的調和 (内面的葛藤からの解放)	想像的な (大胆な, 創造的な)
成熟した愛 (性的, 精神的な親密性)	独立の (自己信頼, 自己充足)
国家の安全 (攻撃を防ぐ)	聡明な (知的な, 思慮深い)
喜び (楽しい, ゆったりした人生)	論理的 (一貫した, 合理的な)
救い (救われる, 永遠の命)	愛情深い (愛情のこもった, やさしい)
自尊 (自己評価)	従順な (忠実な, 丁寧な)
社会的認知 (尊敬, 賞賛)	礼儀正しい (行儀・身だしなみの良い)
本当の友情 (親しい交わり)	責任感のある (当てになる, 信頼できる)
賢さ (人生の成熟した理解)	自己コントロール (自制する, 自己鍛錬)

のような価値対立，等が認められるというものであった。被験者は各指標となる価値を重要さの順に配列した。これらのデータは，Guttman-Lingoes Smallest Space Analysis（SSA）を用いて分析され，距離によって概念の近さを示す2次元空間上に指標価値が位置づけられた。結果は，国を越えて仮定された価値構造が認められ，その普遍性が確かめられた。その後のオーストラリア，ブラジル，中国など世界20カ国，40の集団に対して実施された膨大な研究（Shwartz, 1992）でも，国，集団の違いにかかわらず，類似の価値構造が認められた。これらの結果から，彼は図1のような10の価値領域から構成される理論的な価値構造モデルを提出している。最初のモデルでは，「伝統」は「従順」と「慈善」の間の領域にあることが仮定されていた。しかし，実際の結果から，両者は動機タイプは同じであるが，「順応」は具体的な人物に従うこと，「伝統」は抽象的な対象（例えば宗教）への従順ということで異なる領域を構成しているとみなされた。全体の構造は，2つの極を持つ4つの高次の価値から成っている。最初の次元は一方の極に「刺激」と「自己管理」からなる高次価値が，その対極に「安全」と「順応」それに「伝統」から成る高次価値が来る。これは，「変化に対してオープン」対「保守的」（openness to change versus conservation）の次元である。第2の次元は，一方に「普遍」と「慈善」の高次価値が，他方に「権力」と「業績」の高次価値が来るもので，これは「自己高揚」対「自己超越」（self-enhancement versus self-transcendence）の次元である。快楽は，「変化に対してオープン」と「自己高揚」の2つの高次価値との結び付きが示唆されている。

その他の研究とまとめ

ここでは，3つの代表的な価値尺度を紹介した。日本において，他に価値尺度に関連した研究としては，モリスの類型論に基づいた高木・加藤（1983）の尺度がある。彼らは青年の「生き方」に関する質問から愛他・自己抑制型，受動安定型，現実社会志向型，能動的改善型，内面志向型，積極的社会参加型，柔軟多様型，平穏充足型の因子を抽出している。宮下（1994）は大学生における疎外感と価値観との関係に関する研究において「人間環境志向」「物質機械志向」「対人価値志向」の価値因子を抽出している。伊東ら（1993, 1993）が見いだした個人志向性，社会志向性の因子は，日米の比較においてよく用いられる集団主義・個人主義の因子（高野・櫻坂，1997）と同様にShwartzの自己高揚対自己超越の次元に対応したものと考えることができる。これらの研究でも，因子の抽出とその尺度の妥当性が検討されているが，Shwartzの価値尺度（価値構造）は，価値形成から価値葛藤や統合といった価値のダイナミックな側面の研究，価値の態度や行動への影響の組織的な探索といった面から，特に将来の利用が期待される。

ところで，価値の測度として順位法と評定法のどちらがいいのかについては，評定法の妥当性を示唆する研究が多い。例えば，Maio（1996）は，ある論争点に対する態度あるいはある行動に対する倫理的な判断と，順位法と評定法で測られた価値の重要さとの間の相関を調べた。その結果，評定法の方が順位法より高い相関が得られ，価値の測度としてより妥当であることが示された。

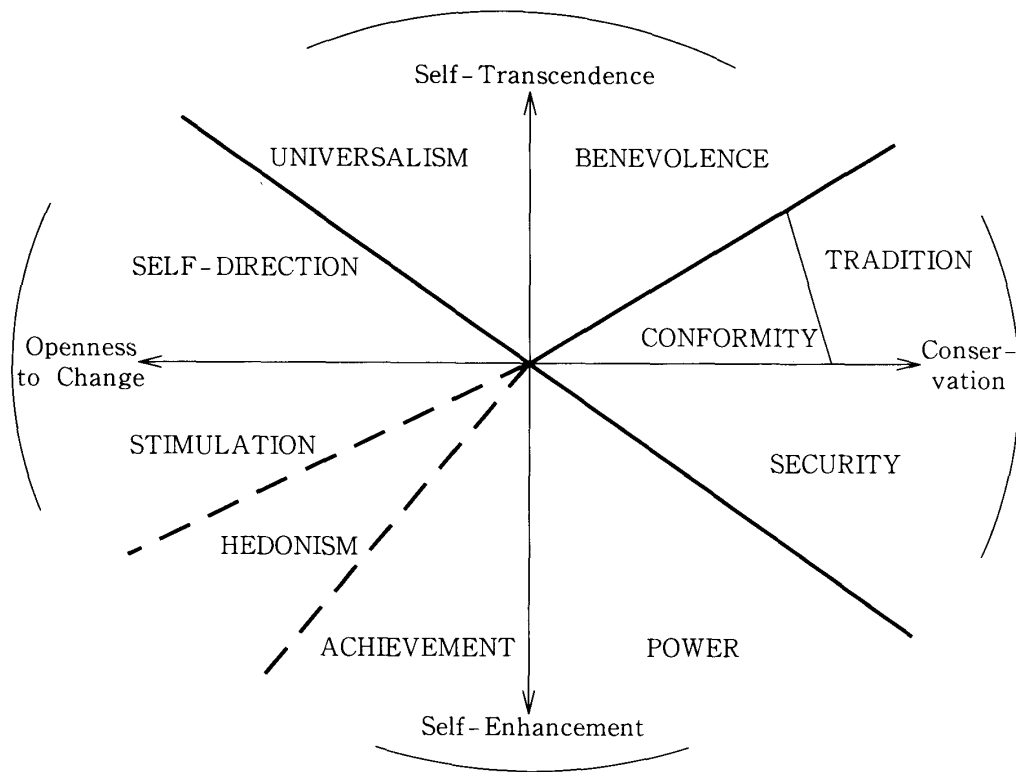


図1 価値の動機タイプ、高次の価値そして価値次元の関係を示すモデル
(Shwarutz, 1992)

価値の変容

人間の認知と行動の変容は、心理学における重要な研究の対象であり、ピアジェの均衡理論や、フェスティンガーの認知的不協和理論、バンデューラの観察学習など様々な理論が提出されてきた。更に、心理臨床に関わる全ての理論が、身体的、認知的、行動的、情緒的のいずれに重点を置くかの違いはあっても、何らかのクライアントにおける変化を想定していることは否定できない。しかしながら、価値の変容に焦点を当てた研究や治療理論は、極めて少ない。本稿では、数少ない価値変容のいくつかを紹介して研究の発展性と臨床への応用の可能性を探る、Rokeach (1973) は、価値変容に関して、次のような前提を提出している。1) 他の多くの認知と行動変容の理論と同様に、人の変化は人が持っている信念の矛盾によって生じる。2) 認知的な矛盾は自己不満 (self-dissatisfaction) をもたらし、この自己不満が、変化を引き起こす。3) 自己不満が最も高くなるのは、自分自身についての認知 (cognition about self) の矛盾である。4) 価値は自己評価の基準なので、社会的行動の変化に際して、態度より重要な要因である。彼は価値変容に導く実験において、大学生に重要さに従って自分の価値を順位づけをしてもらった後、実験群には、大学生の平均的な価値の順位表 (資料1) を見せ、平均的な学生は「自由」が重要で「平等」はあまり重要でないと感じており、学生が他人の自由よりも自分の自由に関心があると伝えた。更に実験群には、資料2を用いて公民権を支持する人は支持しない人に比べて「平等」の価値を重視していることを

示した（これらの手続きは信念の矛盾を引き起こし、自己不満を引き起こすためになされた）。一方、統制群の学生に対しては、資料1、資料2ともに提示しなかった。実験群と統制群の両者に対し、実験の前と後で、黒人ならびに全ての人の平等の権利などへの同意等の変化（態度変容）、価値の重要さの順位の変化（価値変容）それに有色人種の向上のための協会への勧誘にたいする反応等の変化（行動変容）を調べた。事後テストは、実験の後、3週間、3－5ヶ月、15－17ヶ月に行われた。その結果、いずれの測度においても変化が見られたが、価値は3週間後に、態度は3－5ヶ月頃に変化が出現した。このことから、Rokeachは、価値の変化が、態度と行動の変化をもたらしたと結論している。

Maio & Olson (1998) は、自明性としての価値という視点から価値変容を研究している。自明性とは、MacGuire (1964) によって示唆されたもので、人々に広く受け入れられ、同意されているが、認知的な支持が欠けているもの、即ち、めったに問題にされ、疑いをはさまれることなく、その結果、それらの見解を支持するための議論がなされないようなものである。人々に広く受け入れられているという自明性の最初の条件は、実際にそれぞれの価値についてどの程度同意するかを尋ねればよい。次の認知的支持に欠けるという条件について、彼らはWilsonら(1989)によって示唆された方法を用いて確認している。即ち、あまり知識や認知的支持がなく、感情的要素をもった態度の理由を分析することは、態度の変化をもたらすというものである。実験では、5つの「自己超越」の価値と5つの「オープン」価値の重要さを実験操作の前後で評価する。実験群では、「自己超越」の価値が重要あるいは重要でないことの理由を分析した。統制群には、飲み物の好き嫌いの理由を分析するよう求めた。その結果、実験群にのみ価値評価の変化が見られた。しかもその変化の方向は、「重要でない」と「重要である」の両方向であった。更に、前もって被験者に理由を提示し、そのもっともらしさを評価し、グループで話し合うことをさせた場合（認知的支持を与えた場合）、価値変化は起こらないことが示された。彼らは、この結果から、価値は自明性の性質を持つことを提案している。

価値と態度変容

Rokeach (1973) によれば価値と態度の違いは次の通りである。1) 価値は一つの信念であるが、態度は対象や状況に焦点化されたいくつかの信念の集まりである。2) 価値は対象や状況を超えているが、態度は特殊な対象や状況に結びついている。3) 価値は基準であるが、態度はそうではない。4) 価値は望ましい状態や行動の様式に関して学んだ信念の数だけあるが、態度は遭遇した特殊な対象や状況と同じぐらいの数がある。

価値は、人の生活を導く抽象的理念であるので、さまざまな態度に影響を与える可能性がある。Katz & Hass (1987) は、白人の黒人に対する親しみと拒否という両価値的感情が、人道・平等主義とプロテスタント倫理という2つの価値の葛藤から派生しているという視点から研究を進めている。実験1では向黒人と反黒人の態度尺度、それに人道・平等主義とプロテスタント倫理の4つの尺度が作成され、それぞれの変数の関係が検討された。その結果予測どおり、向黒人と人道・平

等主義の間に、また反黒人とプロテスタント倫理の間に正の相関が認められた。実験2ではプライミング技法を用い、前に特定の価値（例えば人道・平等主義）を被験者に評定させることが、結合した態度（例えば向黒人）への傾向を高めるかどうかを検討した。これは概念は関連した材料の連合ネットワークの形で記憶されており、1つの概念の処理は、関連した概念の活性水準を高めるという最近の認知論の仮定に従ったものである。実験の結果は、予測通りであった。

Boninger, Krosnick & Berent (1995) は、ある態度のその個人にとっての重要性を決定する要因として、個人的利害、社会的同一性、価値の影響を検討している。彼らは、態度の重要性の測度として被験者に避妊、死刑、銃規制、交通安全等に対し、その問題が個人的にどの程度重要でどの程度気にしているのかを尋ねた。個人的利害としては、その問題がどの程度自分自身に影響を与えるのか、また社会的同一性については親密な仲間や集団に対してその問題がどの程度重要なのか、価値に関してはその問題に関する自分の意見はどの程度自分の個人的な価値に関係しているのか等を尋ねてそれぞれの測度とした。結果は3つの要因とも態度の重要性に影響を与えることが示された。

Maio (1995) は、Katz (1960) が提案した4つの態度機能（1 実利 (utilitarian) 機能；環境からの報酬を最大にし、罰を最小にする機能 2 知識 (knowledge) 機能；自己並びに自己と環境の関係を意味づける機能 3 自我防衛 (ego-defensive) 機能；受け入れがたい衝動や不安から自我を守る機能 4 価値表出 (value-expressive) 機能；中心的価値や自己概念を表現する機能）と態度に及ぼす価値の影響について検討している。実験では、まず、被験者にいろいろな価値を順位づけてもらった後、価値表出の態度を形成する群では他人を助けるため「がん」研究に寄付しようというポスターを見せ、実利の態度形成の群では自分の利益のために寄付するというポスターを見せた。この態度機能操作の後、両群で寄付についての態度（良い－悪いなど）を測定した。結果は、価値表出の条件では寄付の態度に利他主義の価値が反映されるが、実利条件では寄付の態度はどのような価値とも連関が認められなかった。

以上の研究は、価値が様々な形で、態度や行動の変容に影響を持つことを示唆している。

心理療法における価値の利用

心理療法は、患者あるいは依頼人の困難と見なされる状況や状態が改善されるように援助する仕事である。従って、先に述べたようにクライアント側に、行動的・認知的・情緒的に何の変化も起こらないような治療というのは考えられない。これまで述べてきた研究において価値は、人間の行動や態度に大きな影響を及ぼすことが示された。従って、心理臨床においてクライアントの価値を知り、それを利用することは治療効果を高めると考えられる。心理療法において重要な方法として価値を利用したのはミルトン・H・エリクソンである。Zaig (1985) によれば、利用 (utilization) 法の要点は 1) 患者に備わっている資質（気づかれていない強さ）を明らかにする。2) 患者の価値観を理解する 3) 患者の価値観を利用して資質を育てる 4) 資質を育てて、問題に直接的または間接的に結びつける 5) 一步一步段階を踏み、信頼関係を結び、動機を高め、いつも患者の反応性に

気を配る 6)あらゆる行動は一抵抗でさえも一治療的に受け入れ利用することができる 7)ドラマは、指示への反応性を強化するために用いる 8)考えを示す前にあらかじめ種を蒔いておくと反応が起きやすくなる 9)すべてを左右するのはタイミングである 10)治療者は（そして患者も）、期待していることが必要である。以下には、患者の信念を利用したエリクソンの治療例（O'Hanlon, 1987）を示す

エリクソンは、州立病院で、自分をイエス・キリストだと主張する患者に近づき、君には大工の経験があるんだってね、と声をかけた。イエスの父、ヨゼフが大工であり、イエスには当然父を手伝った経験があったわけだから、患者は、はい、と答えるしかなかった。またエリクソンは、君は仲間たちの役に立ちたいと思っているんだってね、とも言った。患者はこれにも、もちろん、と答えた。そう聞いておいて、エリクソンは、病院には本棚が足りなくて作らなくちゃならないんだが、君は手伝ってくれるかい、と尋ねた。患者は同意し、病状行動の代わりに、建設的な活動に参加し始めるようになった（Haley, 1973）

要 約

価値は人の行動を左右する重要な要因であるにもかかわらず、心理学において十分な注意が払われているとは言い難い。本論文の目的は、価値概念並びに価値尺度が人間行動を理解し予測する上で、他の心理的概念や尺度とは独立した重要な要因であることを示すことである。そのために、行動の選択や評価の内的基準としての価値という Rokeach らの視点を支持した、更に価値に関する Shwartz らの尺度並びにモデルが、価値と人間行動のダイナミックな関係を理解するうえで有益であることを示唆した。また、価値の変容を実験的・操作的に導き、それが態度や行動の変化に影響を与えることを示す研究を紹介した。最後に、心理療法において価値を利用する方法を紹介した。

引用文献

- Boninger, D. S, Krosnick, J. A., & Berent, M. K. Origin of attitude importance: Self-interest, social identification, and value relation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 1995, 61-80.
- Gordon, L. V., & 菊池章夫 価値の比較社会心理学 川島書店 1975
- Guttman, L. A. General nonmetric technique for finding the smallest coordinate space for a configuration of points. *Psychometrika*, 33, 1968, 469-506
- 伊藤美奈子 個人志向的・社会志向的尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究 64 1993 115-122
- 伊藤美奈子 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学 41 1993 293-301
- 伊藤裕子 価値志向的精神作用尺度の作成 教育心理学研究 45 1997 388-395
- Katz, D. The functional approach to the study of attitude. *Public Opinion Quarterly*, 24, 1960, 163-204

- Katz, I., & Hass, R. G. Racial ambivalence and American value conflict : Correllational and priming studies of dual cognitive structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 1988, 893-905
- Maio, G. R., & Olson, J. M. Relation between values, attitudes, and behavioral intentions : The moderating role of attitude function. *Journal of Experimental Social Psychology*, 31, 1995b, 266-285
- Maio, G. R., Roese, N. J., Seligman, C., & Katz, A. Rankings, and the Measurement of Values : Evidence for the Superior Validity of Rating. *Basic and Applied Social Psychology*, 18(2), 1996, 171-181
- Maio, G. R., & Olson, J. M. Values as Truism : Evidence and Implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1998, 294-311
- Maslow, A. H. *Motivation and personality*. Harper and Row, Publishers, Inc 1954 (人間性の心理学 小口忠彦監訳 産業能率短期大学出版 1971)
- McGuire, W. J. Inducing resistance to persuasion : Some contemporary Approaches. In L. Berkowitz (Eds) *Advances in Experimental social Psychology* (Vol.1 191-229), New York : Academic Press 1964
- 宮下一博 大学生における疎外感と価値観との関係 *教育心理学研究* 42 1994 201-208
- O'Hanlon, W. H. *Taproots : Underlying Principles of Milton Erickson's Therapy and Hypnosis*. Norton & Company, Inc., & Japan UNI Agency, Inc., Tokyo 1987 (ミルトン・エリクソン入門 森俊夫, 菊池安希子訳 金剛出版 1995)
- Rokeach, M. *The nature of human values*. New York : Free Press 1973
- Schwartz, S. H., & Bilsky, W. Toward a universal Psychological structure of human values. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1987, 550-562
- Schwartz, S. H., & Bilsky, W. Toward a theory of the universal content and structure of values : Extension and cross-cultural replications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 1990, 878-891
- Schwartz, S. H. Universals in the content and structure of values : theoretical advances and empirical tests in 20 countries. *Advances in Experimental Social Psychology*, 25, 1992, 1-65
- Spranger, E. *Lebensformen : Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der persönlichkeit*. Aufl. Tübingen : Max Niemeyer Verlag 1921 (シュプラランガー 伊勢田耀子訳 文化と性格の諸類型 明治図書 1961)
- 高木耕二・加藤隆勝 「生き方」の類型と世代差について 青年心理学研究会編 現代青年の心理 福村出版 1983 51-69
- 高野陽太郎・櫻坂英子 “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義” *心理学研究* 66 1997 312-327

廣瀬：価値研究の最近の動向と課題

津留宏・秋葉英則・原谷達夫・野辺地正之・関 一・八重島健二 現代青年の価値観と生活意識 依田新

(編) 現代青年の生態－青年心理学研究Ⅱ－ 金子書房 1975 31-58

Vernon, P. E. & Allport, G. W. A test for personal values. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 26, 1931, 231-248

Wilson, T. D., Dunn, D. S., Bybee, J. A., Hyman, D. B., & Rotonde, J. A. Effect of analyzing reasons on attitude-behavior consistency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1984, 5-16

Zaig, J. K. *Experiencing Erickson*. Japan UNI Agency, Inc., Tokyo 1985 (ミルトン・エリクソンの心理療法 中野義行・青木省三監訳 二瓶社 1993)

(1998年10月1日受理)